

フランス語の話し言葉の特徴¹⁾

—談話方略を中心に—

東郷雄二
京都大学総合人間学部
togo@lapin.ic.h.kyoto-u.ac.jp

第1章 話し言葉研究の重要性

1.1. はじめに

今までの言語研究は、書き言葉を主な研究対象としてきた。20世紀言語学は音声中心主義を標榜してきたとはいえ、こと文法研究の分野になると、依然として書き言葉中心の伝統は、特にフランス語学の分野ではまだまだ強いといわなければならない。

このことは、文法研究にある種の「歪み」を生み出してきた。そのひとつは、書き言葉に見られる文法的特徴の過度の一般化であり、これは規範文法の呪縛となって現れている。もうひとつは、話し言葉にのみ特徴的に見られる諸特性の無視である。このことが文法研究に対してある方向性を与えたことは、否定できない事実である。

書き言葉と伝統的規範主義の関係を、Culioli は次のように的確に指摘している。

“(…) la culture française est une culture puriste (...). La langue écrite y est outil de cohérence ; elle nous fournit la sécurité de formes stables, fixées et normées ; elle est un facteur d’unité, elle élimine les à-peu-près interlocutoires ; elle seule paraît munie d’une consistance auto-régulée par un modèle intérieur (...). D’où le sentiment que la langue parlée est inévitablement relâchée (...).”²⁾

書き言葉の安定性は、言語の統一性と一貫性という安心感を与えてくれる。一方、話し言葉は、対話の相手によって微妙に揺れ動くものであり、絶え間のない les à-peu-près の支配する領域で、規範に対しては「緩んだ」ものと感じられる。

この「緩み」の感覚は、話し言葉が文字によって支えられていないということから来ている。

“But some linguists (...) have tended to take over the folk belief, typical

1) 本稿は文部省の科学研究費（基盤研究C課題番号 07610492）の助成を受けて行われた研究の成果である。本稿の一部はすでに「会話フランス語のストラテジー — 談話への名詞句の導入をめぐって」、『フランス語学研究』第31号、p.15-26、1977として発表されている。

2) A.Culioli “Pourquoi le français parlé est-il si peu étudié?”, Recherches sur le français parlé 5, p.295

of a written culture, according to which spoken language is disorganized and featureless, while only writing shows a wealth of structure and a purity of pattern. This is 'demonstrated' by transcriptions in which speech is reduced to writing and made to look like a dog's dinner. " 3)

1.2. ラングの言語学とパロールの言語学

しかし、話し言葉が等閑視されてきた理由のうち最も重要なものは、20世紀の言語学を特徴づけたラング *langue* 重視の傾向であろう。

Saussure を一つの転回点とする今世紀の言語学の大きな流れは、「構造」の言語学である。これは狭義の「構造主義言語学」のみならず、生成文法などにも共通して見られる傾向である。その目標は、言語の規則の体系としての「構造」を取り出すこととされている。

この「構造偏重」の傾向のために、言語研究の対象はきわめて抽象化された *langue* であると規定され、それ以外の言語現象は *parole* の領域へと追いやられたのである。

“Le français parlé n'intéressait guère, si ce n'est comme complément à une étude du français dit 'standard' (ce qui laisserait entendre que le français parlé n'est pas standard), ou pour montrer que la 'parole', c'était décidément autre chose que la 'langue' (la 'parole' comme lieu de la liberté, de l'aléatoire, ou du désordonné) ...” 4)

parole の領域は、話し手の自由と偶然性と曖昧性と混乱が支配する領域であり、言語研究の対象とできるような均質な空間ではないと見なされた。話し言葉がすぐれて *parole* 的対象であると考えられたことは言うまでもない。

1.3. 話し言葉は貧困か？

ではなぜ話し言葉の研究が言語の理解に資するところがあるのだろうか。Halliday はこの点を次のように説明している。

“Why is speech important? It is not because of any intrinsic value in spoken texts. (...) Nor is it because speech comes first in the history of the race and of the individual ; or because it is in some sense logically prior, which is in any case difficult to justify. The reason lies much deeper than this : that the potential of the system is more richly developed, and more fully revealed, in speech. (...) It is in spontaneous, operational speech that the grammatical system of a language is most fully exploited, such that its semantic frontiers expand and its potential for meaning is enhanced. This is why we have to look to spoken discourse for at least some of the evidence on which to base our theory of the language.” 5)

3) M.A.K. Halliday, *An Introduction to Functional Grammar*, Arnold, London, 1985, p.xxiv

4) A. Culioli, *op.cit.* , p.291

5) M.A.K. Halliday, *op.cit.* p.xxiv

書き言葉と較べた場合に、話し言葉はその言語の文法が提供する潜在的可能性をより高度に駆使すると Halliday は上の引用で述べているが、このことは従来の常識の逆を行くものである。なぜならば、ふつうは文法の提供する可能性の高度な展開は、書き言葉において見られるものであり、話し言葉はある意味でそれよりも貧弱で内容に乏しい物だと考えられてきたからである。

ではどうして話し言葉において、文法の可能性の高度な展開が見られるかということについて、Halliday は大きく分けてふたつの理由を提示している。

ひとつは言語の使用される環境のちがいである。書き言葉にくらべて、話し言葉は、会話の流れによって絶えず変化する言語的・非言語的環境にきめ細かく適合する必要がある。そのために、文法的にも意味的にも、書き言葉にくらべてより豊かなパターンを用いる必要に迫られるというのである。

もうひとつは、書き言葉と話し言葉の「複雑さ」の性質のちがいである。Halliday によれば、書き言葉はその表現にあたって、語彙的手段を用いる傾向があり、この結果として語彙的には複雑でも、文法的には単純なパターンを使用する。これにたいして、話し言葉は語彙的には貧弱であり、その代わりに文法的手段を駆使することによって、意味を伝達しようとする傾向がある。Halliday があげる例は、the outlook is for continued high levels of liquidity 「見通しは将来においても高い流動性にある」である。ここでは continued high levels of liquidity という語彙的に複雑な複合名詞句に、意味がいわば「濃縮」されている。これは書き言葉の手法である。同じ内容は、話し言葉では例えば liquidity will continue to be at a high level 「流動性は今後も高いだろう」とか、the amount of cash flowing will continue to be high 「資金の流れは今後とも良好だろう」のように、語彙的にはより平易で文法的手段に依拠した形で「翻訳」することが可能である⁶⁾。

この2点については、後の章でより詳しく検討することにする。

1.4. 話し言葉の先行研究

現在までフランス語研究の領域では、話し言葉の研究は散発的にしか見られない。ここで今までの研究を書誌的に概観しておこう。

(1) 古典的研究

古典的研究は散発的であり、言語理論に基づいた組織的研究の形を取ってはいない。以下にあげた文献のなかでは、François (1972) が話し言葉の音声転写資料を含んでいる点がやや特異であろう。

Bauche, H., *Le langage populaire*, Payot, 1920

Martinson, P., *Comment on parle français*, Larousse, 1927

Frei, H., *La grammaire des fautes*, Geuthner, 1929

Sauvageot, A., *Français écrit, français parlé*, Hachette, 1962

6) これにて似た指摘が、福地 肇『英語らしい表現と英文法 - 意味のゆがみをともなう統語構造』(研究社出版, 1995) では、「意味のゆがみ」という用語で捉えられていることは興味深い。

Guiraud, P., Le français populaire, Coll. «Que sais-je?», PUF, 1965
Rigault, A. (ed), La grammaire du français parlé, Hachette, 1971
Sauvageot, A., Analyse du français parlé, Hachette, 1972 (邦訳『フランス語の話し言葉』駿河台出版社)
François, D., Français parlé. Analyse des unités phoniques et significatives d'un corpus recueilli dans la région parisienne, SELAF, 1974

(2) 近年の話し言葉研究

近年になって話し言葉研究は新しい展開を迎えている。その要因のひとつは、Provence 大学 Aix-Marseille I の Claire-Blanche Benveniste を中心とするグループが、組織的にフランス語話し言葉研究を推進していることである。この研究成果は雑誌 *Recherches sur le français parlé* に定期的に発表されている。

Ghiglione, R., Matalon, B. & H.Bacri, Les direx analysés. L'analyse propositionnelles du discours,

Presse Universitaires de Vincennes, 1985

Benveniste, Cl.-Bl & C.Jeanjean, Le français parlé. Transcription et description, INALF, Editions

Erudition, 1987

LINX No. 18, numéro spécial "Analyse grammaticale des corpus oraux", Université de Paris X

Gadet, Fr., Le français ordinaire, Armand Colin, 1989

Maillard, M., Comment ÇA fonctionne, Thèse d'Etat, Université de Grenoble III, 1989

Benveniste, Cl.-Bl., Le français parlé. Etudes grammaticales, Editions du CNRS, 1990

Greidanus, T., Les constructions verbales en français parlé, Tübingen, Niemeyer, 1990

Sueur, J.-P., "Sur la syntaxe du récit oral", *Linguisticae Investigationes* XIV-1, 1990

(3) 話し言葉のコーパス

話し言葉研究で最も問題になるのはコーパスである。一般に参照できるものとしては、多少古いけど次のものがある。

Biggs, P. & M.Dalwood, *Les Orléanais ont la parole*, London, Longman

これはエセックス大学の言語センターが実施した言語調査の資料 *Orléans Archive* の一部を公刊したものである。

この他には、Provence 大学 Aix-Marseille I の Claire-Blanche Benveniste を中心とするグループが蓄積したコーパスがある。その大部分は同大学の大学院生が修士論文や DEA 論文を作成するために義務として課せられたコーパス作成の産物である。コーパスの目録が作成されているが、残念ながら現在のところ一般には公開されていない。筆者は Benveniste 教授との個人的関係から、このコーパスの一部を入手することができたのは幸運であった。

(4) 今後のコーパス研究

近年のコンピュータの飛躍的発達によって、文字情報の入力と検索が容易になった。すでに英語の世界では、Brown Corpus を始めとして、Cobuild Bank of English や、Gutenberg Project など、インターネット経由でアクセスできる電子コーパスも数多い。コンピュータとコーパス研究については、以下の文献を参照。

Barnbrook, G. , Language and Computer. A Practical Introduction to the Computer Analysis of Language, Edinburgh, Edinburgh UP. 1996

Kytö, M., O. Ihalainen, et al., Corpus Linguistics. Hard and Soft, Amsterdam, Rodopi, 1988

McEnery, T. & A. Wilson , Corpus Linguistics, Edinburgh, Edinburgh UP, 1996

残念なことに、フランス語に関しては書き言葉のコーパスとしては INALF の Frantext, Discotext があるが、話し言葉のコーパスは皆無である。この点で今後進展が望まれるところである⁷⁾。

第2章 話し言葉フランス語の特徴

2.1. はじめに

さて、第1章の 1.3. で、Halliday が書き言葉よりも話し言葉の方が、文法の可能性をフルに活用していると考えられる理由をあげた。

Halliday があげる理由の第一は、本報告書では「談話モデル」という形で捉えられている。話し言葉の最も大きな特徴は、固定的で静止した書き言葉とは異なり、常に変化する言語環境のなかで、話し手と聞き手のあいだで取り交わされる「相互作用」だという点である。この「談話モデル」の詳細は、本報告書の以下の章を見られたい。

Halliday があげる第二の理由は、筆者が「語用論的透明性」*transparence pragmatique* と呼んでいるものとの関係がある。Halliday のいう意味の「濃縮」とは、統語的に単純な形式に複雑な意味内容を盛り込むことを意味している。このような「濃縮」は、時系列に沿った展開をする話し言葉では、認知の面で困難を生じることは明らかである。話し言葉ではこのような意味の「濃縮」とは逆の「透明性」が好まれる。

この透明性を極限的に表しているのは、ピジン・クレオールに特徴的に見られる傾向であろう。Hagège はピジン・クレオールでは、動詞の表す事行の各段階をひとつひとつ分解して、動作をなぞるように表現する傾向があることを指摘している⁸⁾。例えば、フランス語の *Il vient de me cueillir une noix de coco.* は、ハイチ・クレオールでは、次のように表現されるという。

7) フランス語学へのコーパスの応用に関しては、阿部 宏「フランス語学の電子コーパス」、『フランス語フランス文学研究』No. 71, 1997 がある。

8) Cl. Hagège, *La structure des langues*, Coll. «Que sais-je?», PUF, 1982, p.120

I fek sot rive keyi u kok vin ba mwe
il ne-fait-que sortir arriver cueillir une coco venir donner moi

これは動詞の表す複雑な意味を、ばらばらに分解して、ひとつの記号がひとつの意味だけを表すようにしたもので、これは語彙的レベルでの透明性といえる。

このような語用論的透明性は、文法化 grammaticalisation の過程を経て、より濃縮された syntaxe へと変化すると考えられている。

2. 2. 統語面での語用論的透明性

上に見たような語彙面での透明性とは別に、統語面においてもまた語用論的透明性が見られる。これは次のような談話構築に関するメタ原理のかたちで表現することができるだろう。

(1) 談話構築に関するメタ原理

談話においては、機能の重合 cumul を避けよ

この原理は、話し言葉における関係代名詞の使用に関して、Guiraud⁹⁾ と Gadet¹⁰⁾ がすでに指摘している。それによれば、話し言葉のフランス語では、関係代名詞は曲用を避けて、一律にqueを用いる傾向がある。

- (2) a. une chose que tu peux en être fier (dontの代用)
b. la femme qu'il lui causait (à qui の代用)
c. ce sont sans doute les Allemands qu'ils l'ont fait (quiの代用)

une chose dont tu peux être fier とすると、関係代名詞 dont は次のふたつの統語的機能を兼務することになる。

- 1) 関係節のマーカー
- 2) 先行詞の文法的役割の表示 (この例では de に導かれる目的語)

つまり、ひとつの言語形式がふたつの統語的役割を持っていることになる。これが機能の重合 cumul である。時系列に沿って展開される話し言葉では、この機能の重合を避ける傾向があり、それぞれを異なった記号で表現することになる。

- 1) 関係節のマーカー → 一律に que
- 2) 先行詞の文法的役割の表示 → 文法関係を示す残留代名詞 (この例ではen)

こうすることによって、もともとひとつの関係代名詞が担っていた機能を、別々の記号に

9) P. Guiraud, Le français populaire, Coll. «Que sais-je?», PUF, 1965

10) Fr. Gadet, Le français ordinaire, Armand Colin, 1989

割り当てることができ、語用論的透明性が実現されることになる。

Giraudはこのような現象が起きる理由を、ラテン語からフランス語への変化に見られる分析的傾向の強化の一例と見なしているが¹¹⁾、これは皮相な見方と言わねばならない。本当の理由は、話し言葉に特徴的な、談話の時系列に沿った逐次的処理にあると考えるのが妥当である。

2.3. 名詞主語の問題

ここでは統語面でのメタ原理の発現の一例として、名詞主語の問題を取り上げてみよう。

話し言葉のフランス語で名詞主語の少ないことは、すでに何人かの研究者が指摘している。例えば François¹²⁾ は、自分の調査した資料のなかに登場する名詞の総数1550のうち、文の主語として用いられているのは46例しかないことを報告している。残りの1504の名詞は、主語以外の統語的位置で用いられているのである。一方、代名詞主語は1440例あり、圧倒的に多数であるという。

また Jeanjean¹³⁾ はふたつのコーパスの分析から、すべての文のうち名詞主語を持つ文の割合は2%～2.8%にすぎず、92.1%～92.2%は代名詞主語であると述べている。

この点を確認するために、筆者自身のコーパス¹⁴⁾ を同じ観点から分析した。その結果は以下の通りである。

(3) 表 1 名詞主語の出現率 (1)

名詞主語	16	(5.7%)
代名詞主語	249	(88.6%)
転位主語	16	(5.7%)
計	281	

また今回入手した Provence 大学 Aix-Marseille 1 のコーパス¹⁵⁾ の分析結果は以下のとおりである。

(4) 表 2 名詞主語の出現率 (2)

名詞主語	26	(2.4%)
代名詞主語	969	(88.7%)

11) “Or le français est une langue analytique sortie de la langue synthétique qu’est le latin. Toute l’histoire de l’idiome atteste le décumil des formes synthétiques.” (Giraud, op.cit. p.47)

12) François, D., Français parlé. Analyse des unités phoniques et significatives d’un corpus recueilli dans la région parisienne, SELAF, 1974

13) C.Jeanjean, “L’organisation des formes sujets en français de conversation. Etude quantitative et grammaticale de deux corpus”, Recherches sur le français parlé 3, 1981

14) 筆者が Grenoble大学の学生に依頼して作成したもので、録音時間約30分にわたる自由会話を転写したものである。

15) Corpus “Maçon” 石工と客の女性 (50-55歳)の会話を40分にわたって録音したものの。

転位主語	98	(8.9%)
計	1093	

多少の差があるものの、名詞主語の出現率は 2.4%から 5.7% であり、非常に低いことがわかる。比較のために書き言葉のフランス語について同様の分析をした結果を掲げておく¹⁶⁾。

(5) 表 3 名詞主語の出現率 (3)

名詞主語	103	(39.3%)
代名詞主語	159	(60.7%)
転位主語	0	(0%)
計	262	

書き言葉では、名詞主語が約40%もあり、話し言葉の結果と有意な差を示している。

その他の違いとしては、表1では16例 (5.7%)、表2では98例 (8.9%) 観察された転位主語名詞が、書き言葉の表3では一例も見られないことである。

話し言葉での転位構文の多さはすでに指摘されている。Barnes は自分のコーパスでは、名詞主語109例にたいして、転位主語は310例あり、転位主語の方が多いことを報告している¹⁷⁾。筆者の分析でも表2では98例観察され、名詞主語の26例のほぼ3倍見られる。

今度は名詞主語の内訳を見てみると、次のようになる。

(6) 表 3 主語名詞句の内訳 (1)

不定名詞句	1
定名詞句	15

(7) 表 4 主語名詞句の内訳 (2)

不定名詞句	1
定名詞句	21
固有名詞	4

(8) 表 5 主語名詞句の内訳 (3)

不定名詞句	26
定名詞句	72

話し言葉の表3と表4では、不定名詞句がただ1例ずつしか観察されないのにたいして、書き言葉の表5では98例中26例あり、26%を占めている。約4分の1の高率である。

なぜ話し言葉では名詞主語が少ないのだろうか。また特に不定名詞句主語が少ないのだろうか。Jeanjean は不定名詞句 (より一般的には限量化された名詞句) は、文の主語位置では否定のスコープに入らないのがその理由であると指摘している。

16) 用いた資料は Henri Bosco, L'enfant et la rivière, Folio, Gallimard

17) B.Barnes, The Pragmatics of Left Detachment in Spoken Standard French, Amsterdam, J.Benjamins, 1985

“(…) en sujet, le quantifieur exprimant une quantité relative ne peut être nié par la négation du verbe.

*un homme ne parle pas mais deux
je n’ai pas vu un homme mais deux.”¹⁸⁾

“L’examen de deux corpus de conversation a montré que la répartition des formes sujets n’y est pas aléatoire mais correspond à des tendances dont on peut rendre compte à partir de l’analyse des propriétés qui caractérisent les catégories morphologiques (à partir du refus de la négation notamment).”¹⁹⁾

しかし、この説明は一見しておかしいことがわかる。この説が成り立つためには、コーパス全体で否定文の占める割合がかなりの高率になっていなくてはならない。またこの説明は否定文でのみ成り立つものであるため、肯定文でなぜ名詞主語が少ないかをまったく説明してはくれない。

2.4. 名詞句の分布から見た文の構造

この問題を解明するためには、名詞句から見た文全体の構造を考慮しなくてはならない。

18) C.Jeanjean, op.cit. p.120-121

19) C.Jeanjean, op.cit. p.122

	構文	名詞位置	数
	SVi	S代名詞 S名詞 S遊離名詞	35 2 2
	SVtO	S名詞-名詞 S名詞-O代名詞 S代名詞-O名詞 S代名詞-O代名詞	3 0 34 10
	SViOi	S代名詞-O代名詞 S代名詞-O名詞	5 1
	SVpro	S名詞 S代名詞	1 8
	SVproC	S遊離名詞-C形容詞 S名詞-C名詞 S代名詞-C名詞	1 1 1
	SVC	S遊離名詞-C名詞 S代名詞-C名詞 S代名詞-C代名詞 S代名詞-C形容詞	2 9 3 1
	SVpassif	S名詞- par名詞 S名詞 S代名詞	1 1 6
	SV que 節	S代名詞	12
	SVO慣用句	S代名詞	18

上にあげる表は、筆者の作成した Grenoble コーパスの構文タイプと、それぞれの構文で名詞句が出現している位置を基準に、その出現率を算定したものである²⁰⁾。

この表から以下の事実を読みとることができる。

(a) 名詞句は直接目的語の位置で最も多く出現する

名詞句の出現数で一番多いのは、次のふたつの構文である。

i) S代名詞 - O 名詞 34例

ii) il y a 名詞 34例

奇しくも同数になっているがこれは偶然であろう。il y a の後の名詞は文法的には直接目的語である。従ってこれらはまとめることができ、合計すると68例となって、表の示す数値のなかでは飛び抜けて高い値を示している。

Lambrecht²¹⁾ と Bentivoglio & Weber²²⁾ らの研究では、名詞句は目的語位置で最も多く出現することが報告されており、上の結果はこの観察を裏付けている。

(b) 名詞句は c'est NPの形でも多く出現する

表によれば c'est NP は26例あり、名詞句はこの位置でも多く出現することがわかる。

(c) 項 argument の位置に名詞句をふたつ持つ文は極めて少ない

今ここで主語 S、直接目的語 O、間接目的語 Oi、動作主補語 par NPを、動詞の中心となる項 argument と考えておく。上の表で、項の位置にふたつ以上の名詞を含む文を数え上げると、次のような数字になる。実際の文を同時にあげておく。

S-V-O 3例

Les policiers connaissent tous les gens.

Une famille accepte mal un époux.

tous les jeunes ont un diplôme

S-Vpassif- par NP 1例

Est-ce que les Japonais sont intéressés par la politique?

このように、ふたつ以上の名詞句を項位置に持つ文は、資料全体でわずか4例しかない。それ以外の文は、主語が代名詞か、目的語が代名詞か、それとも両方が代名詞なのである。この顕著な偏りをどのように考えればよいだろうか。

20) 略号の意味は次のとおり。Vi= 自動詞、Vt=他動詞、Vpro=代名動詞、Vpassif=受動態の動詞、S=主語、O=直接目的語、Oi=間接目的語、C=状況補語。

21) K.Lambrecht, "On the status of SVO sentences in French discourse", in R.Tomlin (ed) Coherence and Grounding in Discourse, Amsterdam, J.Benjamins, 1987

22) Bentivoglio, P. & E.G.Weber, "A functional approach to subject word order in spoken Spanish", in Jaeggli, O. & C.Silva-Corvalán (eds) Studies in Romance Linguistics, Dordrecht, Foris, 1986

2.5. Lambrechtの “Preferred clause”

Lambrecht は話し言葉のフランス語の分析結果から、話し言葉に特有の文型が存在することを指摘している。

“The preferred clause unit of spoken French contains one or several clause-initial clitic pronouns which are bound to the verb and an optional lexical constituent after the verb. Thus, given the status of clitic pronouns as verbal prefixes, the preferred clause is a verb-initial structure. (...) The preferred clause structure including this initial position is thus [(COMP) clitic + Verb (X)]. I take this syntactic structure to be the basic information unit of spoken French.”²³⁾

Lambrecht のあげる文型は、文頭の COMP 位置を無視すると、次のようになる。これに加えて名詞句の出現頻度の高い *il y a* 構文と *c'est* 構文を加えると、全部で4つの型が得られる。これに Grenoble コーパスで得られた数字を添えると次のようになる。

- i) pro V 35例
- ii) pro V NP 34例
- iii) *il y a* NP 34例
- iv) *c'est* NP 26例

Lambrechtの preferred clause pattern は、実際にコーパスで観察された頻度の高い構文と見事に一致している。

さてここまでは事実記述のレベルであるが、これをどのように説明するかが問題になる。なぜ名詞句の出現位置は、統語的に限られた環境に限定されているのだろうか。

まず最初に、「項の位置の名詞句の数は最大でひとつ」という側面に着目してみよう。現在までのこの現象に注目した研究はいくつかある。それらの研究では、名詞句の数を、文の情報の提示の方略と関係づけて説明しているものが多い。

例えば Givón は次のように述べている。

“...there exists a strategy of information processing in language such that the amount of new information per a certain unit of message is restricted in a fashion — say ‘one unit per proposition.’”²⁴⁾

この説明を理解するには、少し前提となる知識が必要である。まず、Givón は機能主義的立場から、文は情報処理 *information processing* の方略に基づいて組織化されていると考えている。情報処理の観点から言えば、一度に多量の新しい情報を相手に提示するのは、合理的でない。相手が一度に処理できない可能性があるからである。このために “one unit per proposition”、つまり「節 (文) あたりひとつ」の新しい情報を提示するというストラ

23) K.Lambrecht, op. cit. p.220

24) T.Givón, “Focus and the scope of assertion. Some Bantu evidence”, *Studies in African Linguistics* 6, 1975

テジーが言語には存在するというのである。

Du Bois もこれとよく似た考え方を示している。

“Clauses with on direct argument realized as a full noun phrase are the most common, while clauses with no full noun phrase also occur often. But clauses with two full noun phrase direct arguments are extremely rare. (...) We may call this the one noun phrase constraint (...). Rather, preferred argument structure is itself founded on characteristic patterns of preferred information flow in Sacapultec narrative discourse (and likely in other languages and genres as well). There appear to exist consistent and well defined patterns for the introduction of new information and the management of old information throughout a discourse.”²⁵⁾

またChafe は同様な談話制約を One New Concept at a Time Constraint と呼んで、次のように述べている。

“Simply stated, it is the finding that only one concept can be changed from the inactive to the active state during any one initial pause. “
“a single intonation unit can convey no more than one previously inactive, or new concept. “
“This constraint results naturally from what I take to be the cognitive basis of an intonation unit : the expression of a single focus of consciousness.”²⁶⁾

では実際の談話で、このような談話制約が本当に働いているかどうかを確かめるために、筆者の作成したコーパスの一部をこの観点から分析してみた。以下がその結果である。話題は日本の食べ物について。

Oui ben les quinze premiers jours ça étonne / c'est pas que c'est pas bon / mais c'est que ça te dit rien du tout quoi / t'as vu les plats / bon ben ya des choses / on dit que c'est mangeable / ça peut être n'importe quoi / ça peut être un tableau / ça peut être n'importe ... / alors ça donne pas envie de manger / et puis bon au fur et à mesure tu...tu apprends les goûts donc / ya des choses très très bonnes du style “sushi” / le poisson cru c'est c'est vraiment délicieux / j'ai rien mangé de meilleur / puis ya des choses aussi / beignet de bout de pieuvre je crois / un peu tu vois ça / on te dit tu vois les morceaux ... /et finalement c'est très bon

ボールド体にした部分が名詞句である。名詞句の出現位置を統語的環境で分類してみると次のようになる。

25) J.W. Du Bois, “Competing motivations”, in J.Haiman (ed) Iconicity in Syntax, Amsterdam, J.Benjamins, 1985

26) W. Chafe, “Cognitive constraints on information flow”, R. Tomlin (ed.) Coherence and Grounding in Discourse, Amsterdam, J.Benjamins, 1987

i) 直接目的語

t'as vu les plats
tu apprends les goûts
tu vois les morceaux

ii) ya NP

ya des choses
ya des choses très très bonnes du style "sushi" 27)
puis ya des choses aussi

iii) 属詞

ça peut être un tableau

iv) 遊離名詞句

le poisson cru c'est c'est vraiment délicieux

v) 状況補語 (副詞的)

les quinze premiers jours ça étonne

vi) その他

beignet de bout de pieuvre je crois

談話の流れを情報単位 information unit に区切ったものが、上の会話例のスラッシュ記号が示しているものである。談話では、書き言葉で定義されるような文とは異なった情報単位ごとに、情報が処理されると考えられている。Chafe によれば、この情報単位は主としてイントネーションによって画定され、英語では平均して5～6語からなっているという²⁸⁾。

筆者のコーパスを、イントネーションを基本にして区切ってみると、区切りはほぼ節と一致していることがわかる。そしてひとつの単位には名詞句がまったくないか、あるいはひとつしかなく、ひとつの単位にふたつ以上の名詞句がある例は見られない。確かに Givón の言うように、「節あたり名詞句はひとつ」という原則は守られているのである。

2.6. 談話の指示物と認知状態

話し言葉による談話では、このように「節あたり名詞句はひとつ」の原則が守られていることがわかった。Givón, Chafe, Du Bois らは、この原則を談話における情報の流れという機能的原理から説明しようとしている。聞き手の情報処理の負荷を考慮して、「節あたり新情報はひとつ」という機能的原理が働くというのがその骨子である。

しかし、すぐに気付くことだが、このような説明が成り立つためには、名詞句がいつでも新情報を表すのかという予備的問題を論じなくてはならない。「節あたり名詞句はひとつ」と「節あたり新情報はひとつ」というふたつの命題の等価性は、「名詞句」イコール「新情報」でなければ成立しないし、そのような同一視は一見して疑わしいからである。

27) des choses très très bonnes du style "sushi" は、全体でひとつの名詞句を形成しているが、NP de NP のように、ふたつの名詞句に分けることもできる。

28) W. Chafe, op. cit. p.22

ここでは「談話モデル」discourse model という考え方を採用するのだが、その詳細は後に譲るとして、ここでかたんに談話と名詞句の関係について予備的考察を展開しておこう。

談話は話し手と聞き手の間で展開される相互作用であると規定する。その場合に重要になるのは、相手の知識状態のアセスメントである。話し手と聞き手とは、相手の知識状態をアセスメントしながら、談話を構築していく。

談話に登場する名詞句が指示する対象を、「談話の指示物」discourse referent と呼ぶ(以下 DR と略記する)。DR は何らかの統語的手段で談話に導入され、話し手と聞き手の間で話題にされ、最後に談話から消えていくと考えられる。話し手も聞き手も知っている DR は、改めて談話に導入する必要はない。しかし、聞き手がまだ知らない DR は、話し手によって新たに談話に導入される必要がある。これが DR の談話内での確立に関する談話の方略である。

ここではメンタル・スペース理論に依拠して、DR の談話内での確立の状態を、DR の認知状態と呼ぶ。DR を登録する場として、話し手スペースと聞き手スペースとを想定する。ふたつのスペースはコネクタで結合されている²⁹⁾。話し手のスペース内に存在する DR の対応物が、聞き手のスペース内にすでに存在する場合は、聞き手はその DR にたやすくアクセスすることができる。しかし、対応物が存在しない場合は、話し手が明示的に DR を談話に導入するか、聞き手が何らかの手段でその対応物にアクセスすることができるようにしなくてはならない。

DR の聞き手スペース内での認知状態を、Prince³⁰⁾ にならって次のように分類しておこう³¹⁾。

(9) 談話の指示物の認知状態

(a) Textually Evoked

先行談話での明示的言及によって、聞き手スペース内にすでに登録されている場合。DR はふつう定名詞句や代名詞によって表現される。

ex. Susie went to visit her grandmother and the sweet lady was making Peking Duck

(b) Situationally Evoked

発話の場や、話し手・聞き手との関係によって、アクセス可能な場合。DR は人称代名詞・指示詞・定名詞句などで表現される。

ex. lucky me just stepped in something

(c) Inferrable

聞き手スペースには登録されていないが、すでに聞き手スペースに存在する

29) スペースとコネクタの詳細については、G. Fauconnier, *Espaces Mentaux*, Editions de Minuit, 1984を参照のこと。

30) E. Prince, "Toward a taxonomy of given-new information", in P.Cole (ed) *Radical Pragmatics*, New York, Academic Press, 1981

31) Princeは"The ZPG letter : Subjects, definiteness, and information-status", in W.C. Mann & S.A. Thompson (eds) *Discourse Description : Diverse Linguistic Analyses of a Fund-Raising Text*, Amsterdam, J.Benjamins, 1992 で、discourse-new (old) / hearer-new (old) という新しい概念を用いてこの分類をしておしているが、本質的な部分は代わらないので、本稿ではPrince (1981) の分類に依拠する。

DRから検索できる場合

ex. I went to the post office and the stupid clerk couldn't find a stamp

(d) New-Unused

談話では初めて登場するが、話し手と聞き手の共有する知識からたやすく検索できる場合。DR は固有名詞や定名詞句で表現される。

ex. Rotten Rizzo can't have a third term.

(e) Brand-New Anchored

談話では初めて登場するが、他の DR や話し手・聞き手との関係で検索できる場合。

ex. A rich guy I know bought a Cadillac.

(f) Brand-New

談話に初めて登場し、また既存の DR から検索できない場合。DR は不定名詞句で表現されることが多い。

ex. I bought a beautiful dress.

2.7. 談話の指示物の導入方略

さて、上のような前提をもとに、統語的位置による名詞句の分布のばらつきの問題を考えてみよう。

例えば、Un garçon est venu me voir. のような文があるとする。主語の un garçon は不定名詞句であり、ここでは明らかに Brand-New である。上で示した話し言葉のフランス語の統計からわかるように、一般的に名詞主語は少ないが、なかでも不定名詞主語は極端に少ない。不定名詞句が Brand-New であり、新情報を表すことを考慮すると、話し言葉では主語位置で新情報を提示することを避ける傾向があると考えられる。

(10) 談話内への DR 導入の方略 (1)

主語位置での新規 DR の導入は避けよ

またこれも統計からわかるとおり、名詞句の生じる位置として最も多かったのは、次の3つであった。

i) pro V NP

ii) ya NP

iii) c'est NP

この位置には Brand-New を表す不定名詞句も、自由に生じることができる。

(11) a. on voit des vieux matelas éventrés, des sacs de poubelle...

b. ya un monsieur avec cravate et tout quoi vraiment le cadre dynamique à la japonaise...

c. c'est un accent japonais fantastique

これらを勘案すると、次のような方略が存在することが考えられる³²⁾。

(12) 談話内への DR 導入の方略 (2)

新規 DR は動詞のうしろの位置 post-verbal position で導入せよ

ではなぜこのような方略が談話に存在するのだろうか。これを解明するためには、再び談話における情報処理の流れを考えなくてはならない。

Chafe は自然な談話における情報の流れは、次のようなものだという。

“A speaker does not simply thrust concepts forward out of nowhere. The usual technique for presenting information is to choose some concept, typically some referent, as a starting point and then to add information about it. As a speaker proceeds to verbalize one focus of consciousness after another, each added piece of information is attached to some other piece that is in some sense already present.”³³⁾

話し手が聞き手にとって新しい情報を提示する場合には、それをいきなり提示するのではなくて、すでに存在している別の情報と関係づけて提示するということである。Chafe はここで focus of consciousness という用語を用いているが、われわれの用語を用いるならば、新情報はすでに存在している旧情報とリンクされることによって、その処理のための認知的負荷が低減されると表現することができよう。

Chafe はこのような考えに基づいて、次のような談話的原理を提唱している³⁴⁾。

Light Starting Point Constraint

- (a) A starting point is usually a given referent
- (b) Occasionally a starting point is an accessible referent
- (c) A starting point is rarely a new referent, and then only at the beginning of a major section of a discourse

starting point は普通の文では主語にあたる。(a) が述べているのは、「主語は旧情報でなくてはならない」という原則である³⁵⁾。(b) の accessible は、Prince の分類では Inferrable に相当する。従って (a) (b) をまとめると、「主語は旧情報であるか、または先行文脈や発話の状況から容易に引き出すことができるものでなければならない」ということになる。

実際に、Maçon Corpus で見られた主語名詞句の認知状態を調べてみると、次のような結果が得られた。

(13) 表 7 主語名詞句の認知状態

32) D.François, op. cit. によれば、彼女のコーパス中で主語名詞句は46例しかなかったが、目的語は300例あったということである。注目すべきなのは、その他の1200例の名詞は、前置詞句・副詞句・節外の名詞句であったということである。このデータは一考を要するが、本稿では触れないことにする。

33) W.Chafe, op. cit., p.36

34) W. Chafe, op. cit., p.37

35) Chafeのいう given information は、Prince の分類では Textually Evoked, Situationally Evoked に相当する。

Textually/Situationally Evoked	1
Inferrable	10
Brand-New	3

これを見ると、大多数は Inferrable であり、先行文脈などから引き出すことのできる情報であることがわかる。このうち3例が Brand-New であることが目を引く。以下がその実例のすべてである。

- (14) a. un camion doit rentrer non
 b. et puis un jour que les pierres tombaient il m'a dit ben le mur je le ferai réparer
 c. on dit que ces plaques blanches de les rats le bouffent ou que ça s'émiette dans les murs

これらの例は Chafe の提唱する原則に一見合致しないように見える。この例をどう扱うかは、後に章を改めて論じることにする。主語位置で新情報を表す名詞句が少ないことは、このように Chafe の提唱した原則を認めれば説明することができる。では談話内への DR 導入の方略(2)で示した、「新規 DR は動詞のうしろの位置 post-verbal position で導入せよ」という原則はどのように理解すればよいだろうか。これについては Chafe は何も述べていない。

Chafe が上に述べた談話における情報の流れの原則は、次のような極めて一般的な談話方略として定式化できるだろう。

(15) 談話内への DR 導入の方略(3)

聞き手スペースに未登録の DR を、談話内に唐突に持ち込むことを避けよ

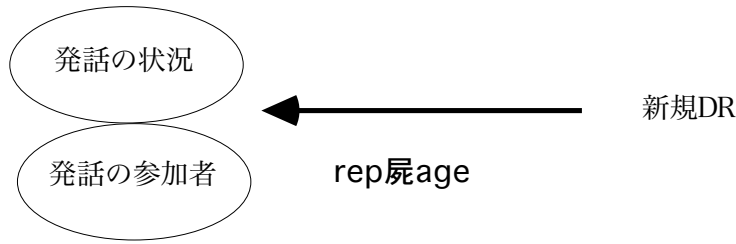
談話内に未登録の DR を唐突に持ち込むことを避けるためには、新規 DR を何か他のものとの関係づけるという手段が有効である。この関係づけを「定位操作」repérage と呼ぶことにする。

定位操作は発話の状況に対して行われることがある。発話の現場や、話し手・聞き手は、所与の要素であり、これらに対して定位することは、DR を有効な関係づけのなかで提示することになる。例をあげよう。

- (16) a. c'est sensationnel hé ce coin
 b. moi quand mon mari est mort j'ai eu ri

a. では ce coin 「この界限」は、発話の現場を指している。たとえこの DR が初めての言及対象であったとしても、聞き手は発話の現場ということから、容易に理解することができる。

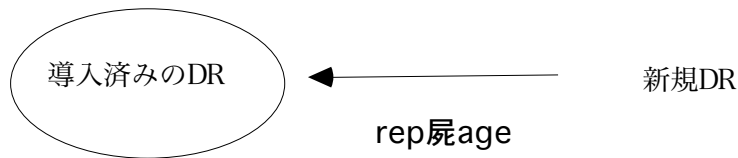
b. では mon mari はここで初めて出てきた話題であるが、話し手 moi と関係づけられることで、アクセスが可能になる。



定位操作は先行文脈が既に導入した DR に対する関係づけとしても機能する。

(17) Je suis en train de ranger une maison dans la rue Carreterie et ben je suis en train de refaire le l'escalier

ここでは une maison → l'escalier という関係が成立しており、l'escalier はその家の一部であることから容易に理解できる。これは maison という語彙内容が喚起するフレームを利用した導入方略である³⁶⁾。



これに関連して注目されるのは次の点である。Jeanjean³⁷⁾ は会話フランス語では不定名詞主語は極めて少ないことを指摘したのちに、数少ない不定名詞主語には共通の特徴があり、それはしばしば après, ensuite, hier, en 1943 などの repère temporel を伴っており、これらの repère は前置されていることが多いという。次は Jeanjean のあげている例である。

(18) a. en 1943 une camarade de classe la contacte
 b. entre temps un gouverneur général était venu nous rendre visite
 c. et après une jeune femme que je connais pas dit cent francs
 d. ainsi hier un homme politique disait je ne peux pas parler avec un ministre qui...

これとは独立に Kirsner は、オランダ語で不定名詞句を主語に持つ自動詞文では、他の文にくらべて場所句を持つ率が高く、しかもその場所句は前置されることが多いという観察を示している³⁸⁾。

これらの観察が意味しているのは、文頭に生じた場所や時間的關係を表す語句が、不定名詞句導入のための repère として機能しているのではないかということである。これらの

36) これはいわゆる連想照応 anaphore associative である。

37) C. Jeanjean, "La distribution syntaxique de Un N sujet en français parlé", Recherches sur le français parlé 7, 1985

場所や時間を表す語句は、先行談話との空間的・時間的つながりを明示することで、新規 DR 導入の定位操作の手がかりとなっていることが考えられる。

定位操作にはもうひとつのタイプがあり、それは動詞の項構造を利用した方略である。ここで項構造 *argument structure* というのは、述語の語彙内容が規定する意味役割のネットワークをさす。項構造については、いろいろな考え方があがるが、ここでは意味役割に基づいて、次のように単純に考えておく。

英語に例を取るならば、*put* という動詞は、3項動詞であり、次のような項構造を持つとされている。

put : [agent, theme, location]

John *put* the book on the desk
agent theme location

意味役割のうち、下線を施した *agent* は外項 *external argument* であり、残りが内項 *internal argument* である。ここで外項と内項のちがいに注意しよう。内項の意味役割は、述語の意味のみによって規定される。例えば、*break* [*goal*] という項構造において、[*goal*] の項は *break* の語彙内容によって一義的に規定される。これは内項が述語の補部であることから当然である。一方、外項は述語だけではなく、述語と補部の全体によって、初めて意味役割が付与される³⁹⁾。一例をあげると、

- (19) a. *John broke the window.*
 b. *John broke his arm.*

この例では、同じ動詞を用いているが、a. では *John* は意図的に何かを行った動作主 *agent* であるのにたいして、b. では非意図的に何かを被った経験者 *experiencer* である。以上のことから、述語がそれ自身の語彙内容によって直接に規定する項構造は、内項だけであると見なすことができる。

こう考えれば、新規 DR を目的語位置で導入することの持つ意味が見えてくる。次の例を見てみよう。

- (20) a. *moi j'ai mon fils aîné il gagne un pognon fou*
 b. *je suis en train de ranger une maison dans la rue Carreterie*
 c. *il avait prévu un mètre cube de sable et trois sacs de ciment*

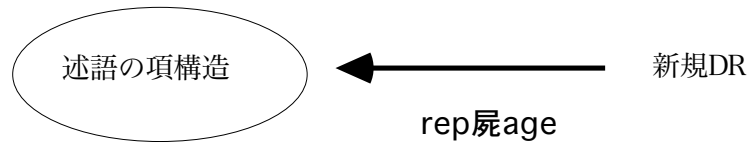
a. では *il gagne un pognon fou* という所に不定名詞句の新規 DR が生じている。ここで

38) "... it is instructive to observe that Dutch sentences with unfamiliar participants-in-focus (referred to with indefinite NPs) contain a significantly higher percentage of locative phrases than sentences with familiar ones (referred to with definite NPs) and that, in the former, the locatives tend to be mentioned first." (R.S.Kirsner, *The problem of presentative sentences in Modern Dutch*, Amsterdam, North-Holland, 1979)

39) 生成文法では、「述語はその補部を直接的に θ -mark するが、その主語は間接的にしか θ -mark されない」と表現されている。

は un pognon fou 「途方もない大金」は、gagner 「稼ぐ」の目的語であり、gagner という述語の項構造の一部として生じている。b. の ranger une maison 「家を整える」の une maison と ranger の関係も同様と考えてよい。

これらの例では、述語の語彙内容が形成する項構造のネットワークが受け皿となって、新規DRを談話内に導入している。このことが、目的語位置で名詞句が多く生じる理由と考えられるのである。



2.8. 提示構文

名詞句が最も高率で生じるのは、次の3つの統語的位置であった。

- i) pro V NP
- ii) il y a NP
- iii) c'est NP

ここまでは、これらの統語的位置を、目的語という文法関係に基づいて一律に扱ってきたが、このなかで他とは区別される特殊なタイプがある。それは提示構文 *construction préésentative* である。提示構文とはその述語が新しい指示対象を談話に導入することをもつぱらの機能としている文をいう⁴⁰⁾。典型的なものは存在文であるが、それ以外にも *c'est NP* 構文の一部や、avoir のように意味の希薄な動詞を用いた構文がこれに含まれる。

次は *il y a* 構文の例である。

- (21) a. on a vu dans les films ya des immeubles qui courent de mauvais côté quoi
 b. un jour je me suis perdu dans le métro ya un monsieur avec cravate et tout quoi vraiment le cadre dynamique à la japonaise ...
 c. c'est parce qu'ya ya un policier pour chaque quartier aussi c'est très très ... ils connaissent beaucoup

存在文が新規 DR の談話内への導入に用いられることは、異論のないところであろう。存在文は一種の存在限量子 *existential operator* だからである。

しかし、これ以外に avoir のように意味の希薄な動詞を用いた提示構文がある。

- (22) a. si vous avez quelqu'un qui pénètre un truc
 b. moi j'ai mon fils aîné il gagne un pognon fou
 d. j'ai un ami là il me disait....

40) "Presentation S. The VP denotes, essentially, the appearance of the subject in the world of the discourse." (J.Guéron, "The syntax and semantics of PP Extraposition", *Linguistic Inquiry* 11, 1980)

このように新規 DR の談話内への導入のために、特殊な構文が用いられることは、すでに多くの研究が指摘している⁴¹⁾。

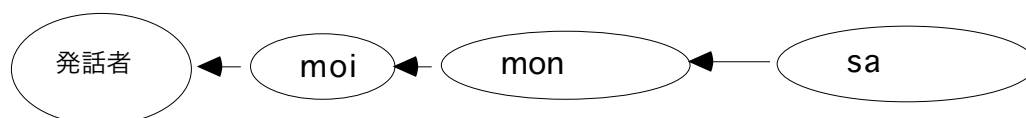
この例をもう少し詳しく見てみよう。上の例文 a. の *si vous avez quelqu'un qui pénètre un truc* において、*si vous avez* の部分は動詞 *avoir* 本来の所有の意味はなく、この文は *si quelqu'un pénètre un truc* としても意味は変わらない。また b. の *moi j'ai mon fils aîné il gagne un pognon fou* も、その意味するところは *mon fils aîné gagne un pognon fou* と同一である。

これらの例文においては、新規 DR は直接目的語として生じているので、先に述べたように、この新規 DR は動詞の項構造を *repère* として導入されていると考えられるかも知れないが、それはおそらく適当ではない。*avoir* のような動詞はもともと意味が希薄なところに加えて、本来の所有の意味をほとんど失っており、このような場合、項構造は適切な *repère* として機能することが難しいと考えられるからである。

これらの例においては、動詞 *avoir* はむしろ新規 DR をその「所有者」にたいして関係づける *repérage* の機能そのものを担っていると考えべきである。このような *repérage* は、Culioli が好んであげる次のような例に見てとることができる⁴²⁾。

- (23) a. *Moi, mon père, sa voiture, les freins, i déconnent.*
b. *Ma sœur, ya son fourneau, quand on veut allumer, tu as rien à faire, ya un truc prévu pour.*

例 a. の文頭の *moi* は、発話全体を話し手に *repérage* し、そうして定位された *repère* を起点として、後続の名詞句が次々と定位される関係になっている。



さて、*moi j'ai mon fils aîné il gagne un pognon fou* について言えば、この文は3つの部分に分解できる。

moi / j'ai mon fils aîné / il gagne un pognon fou

まず文頭の *moi* は上記の図式と同様に、発話全体を発話者にたいして定位している。この意味で *moi* の果たす機能は、*repérage situationnel* である。

次の *moi j'ai mon fils aîné* は、この談話では初めて登場する新規 DR である *mon fils* を導入している。名詞句 *mon fils* の指示対象は、話し手と関係づけられており、Prince の分類に従えば *Inferrable* に属するが、ここでは *moi j'ai NP* という提示構文で導入されてい

41) この点については次の文献を参照。Bentivoglio "Full NPs in spoken Spanish : a discourse profile", W. J. Ashby (ed.) *Linguistic Perspectives on the Romance Languages*, J. Benjamins, 1993 ; Ocampo, "The introduction of new referents in French and Spanish discourse : one constraint, two strategies", Ashby (ed.) op. cit. ; Lambrecht, op. cit.

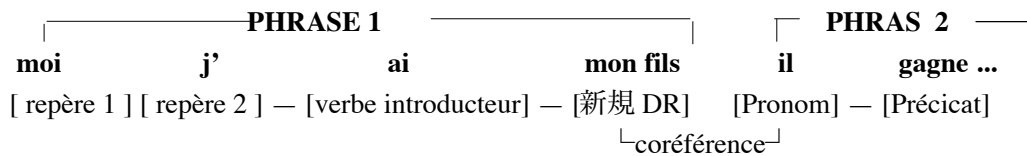
42) A. Culioli, op. cit.

る。

最後の *il gagne un pognon fou* は、第二の部分で導入された *mon fils* について、*prédication* を行っており、この発話のなかでは最も重要な部分を占めている。この発話の伝えたい内容は、「私の息子は法外な金を稼いでいる」ということだからである。

ここで重要なのは、DRの談話内への導入と、DR についての *prédication* が役割分担され、文の別々の部分で実現されているという点である。

この関係は次のような図式で表現できるだろう。



repère 1 は発話全体の定位、*repère 2* は導入される DR の定位の *repère* となっている。導入動詞 *avoir* で導入された新規 DR は、この操作により聞き手のスペース内に登録される。いったん登録されたDRは、後続談話では代名詞による照応が可能になり、*il* で同一指示される。

このように、DRの導入と、*prédication* を別々に分ける方略は、話し言葉のひとつの特徴である。この特徴は話し言葉の特性である「時系列に沿った処理」と「局所的な逐次処理」から説明することができる。話し言葉では、話し手と聞き手のあいだで時系列に沿って変化する言語環境で、話し手は受け取る情報を逐次的に処理しなくてはならない。これが先にも触れた話し言葉の特徴である、語用論的透明性の理由である。このように DR の導入と *prédication* を別にするのは、談話構築に関するメタ原理である「談話においては、機能の重合 *cumul* を避けよ」のひとつの現れであると理解できよう。

Lambrecht はこの点を次のように説明している。

“(...) cumulation of the two functions, the naming function and the relational function, is cognitively more difficult when the position of the NP is one of greater agentivity. From the point of view of discourse this entails that introducing a referent in a proposition and talking about that referent as involved in some action are two tasks that are best carried out independently of each other. This discourse constraint imposed on the cumulation of the referential and the relational function can be expressed in the form of a pragmatic maxim : ‘Do not introduce a referent and talk about it at the same time.’ ” 43)

ここから話し言葉では、次のような談話方略が働いていると考えてよい。

(24) 談話方略

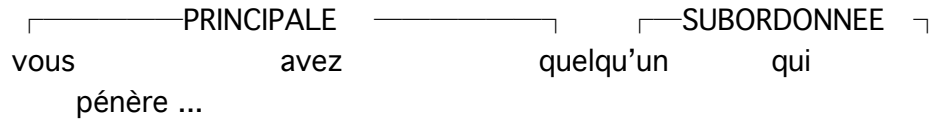
談話内への DR の導入と、DRについての *prédication* を同時に行なうことを避けよ。

さて、上にみた例では談話内への DR の導入とDRについての *prédication* とは、

43) Lambrecht, op.cit. p.254

別々の文によって実現されていた。これは一種の語用論的並置 *parataxe* の状況と言ってよい。

上にあげた例のうち、*si vous avez quelqu'un qui pénètre un truc* はこれとはいささか異なる特徴を示している。ここでは新規 DR の導入と *prédication* は、別々の文ではなく、主節と従節によって実現されている。次のような図式で表現できるだろう。

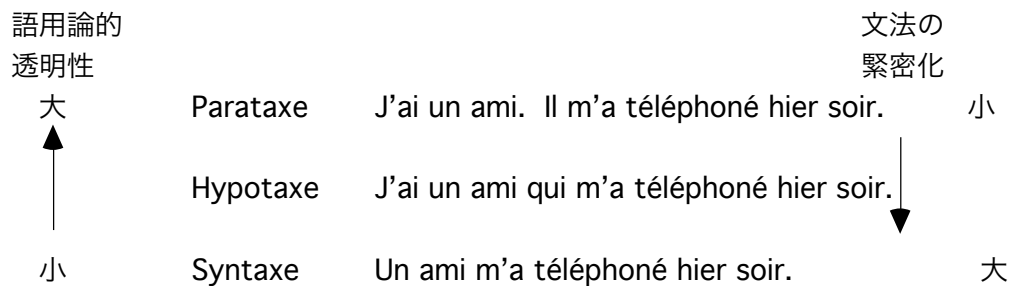


[repère] — [verbe introducteur] — [新規 DR] — [Pre.Rel] — [Précicat]

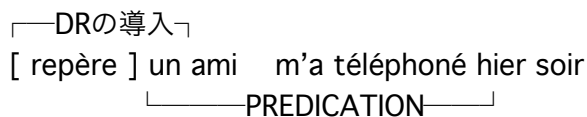
ここでは単なる並置ではなく、文法的により緊密な従属関係 *hypotaxe* になっている。ただし、主節と従節の意味関係は逆転しており、主節は単なる DR の導入手段にすぎず、意味の重点は従節にある⁴⁴⁾。

上の図式で示した *parataxe* と *hypotaxe* では、新規 DR はどちらも主語の位置ではなく、目的語位置に生じていることに注意しよう。

話し言葉でよく用いられるこのような *parataxe* や *hypotaxe* は、書き言葉では逆にあまり用いられない。書き言葉で支配的なのは、普通の名詞主語を持つ主語・動詞文である。このことを考え合わせると、次のような文法の緊密化の図式を立てることができる。



第三段階の *syntaxe* では、名詞句 *un ami* は *parataxe* や *hypotaxe* では分離されていた二重の機能を果たしている。図式的には



主語名詞句 *un ami* は、新規 DR の導入部の一部であると同時に、*prédication* の

44) このような特徴のため、この構文はしばしば疑似関係節と呼ばれている。

一部ともなっている。このような機能の重合が、話し言葉における逐次的処理にとっての障害になることは既に指摘した。

しかしここにはもうひとつ問題がある。それは un ami が何等の repère もなく導入されているという点である。図式で [repère] としておいた部分は実は空であり、これは談話内への DR 導入の方略 (3) で指摘しておいた、DR の談話内への唐突な導入に相当する。

名詞主語を持つ文が話し言葉ではあまり用いられないのは、このような二重の理由によるものと考えられるのである。

2.9. Brand-New 名詞主語の問題

さて、Maçon Corpus では Brand-New の名詞主語が3例観察された。ここにもう一度、少し長い文脈を添えてあげておく。

(25) [L2] Il faut il faut agrandir le portail réduire le mur voyez moi je me suis basé sur le

[L1] ah mais moi il m'avait dit pourtant qu'il avait fait comme ça non remarquez trois mètres dix un camion doit rentrer non

(26) [L1] ah oui mais ah non non le mur est à lui et je sais il me l'avait dit euh je le savait pas et puis un jour que les pierres tombaient il m'a dit ben le mur je le ferai réparer parce qu'il est à moi

(27) [L1] ah oui c'est comme aussi on dit que ces plaques blanches de les rats le bouffent ou que ça s'émiette dans les murs

(25)では改築中の家の門の大きさが話題になっている。[L1]は幅が3m10もあれば、トラックが入れるだろうと言っている。この un camion は特定の対象を指すのではなく、総称名詞である。総称名詞は聞き手のスペース内に DR を導入するのだろうか。これは今まであまり論じられたことのない問題であるが、本稿では総称名詞は聞き手のスペース内に DR を導入しないと考える。以下にその根拠を示す。

談話構築の方略の重要な部分は、聞き手の認知状態のアセスメントである。話し手は、自分が話題にする DR を聞き手が既に知っているか (聞き手のスペース内に登録済みである)、それともまだ知らないか (聞き手のスペース内に未登録である) をアセスメントしながら、談話を構築する。

聞き手の側から見るならば、談話に導入された DR を、自分のスペースを起点として同定しなくてはならない。

(28) A : 車、どこにやった?

B : 裏に駐車しておいたよ。

例えばこの発話でAが言及した「車」は、「ふたりが乗って来た車」のような形で、聞き手によって同定されなくてはならない。

さて、一般に指示対象の同定のためには、それを可能にする資源が必要である。Arielはこの資源には、3つの種類があり、それぞれ異なる場を形成していると論じている⁴⁵⁾。次の3種類である。

(29) 指示対象同定のための資源

- A. Encyclopaedic knowledge
- B. Physical environment
- C. Linguistic context

それぞれの典型的な例をあげておく。

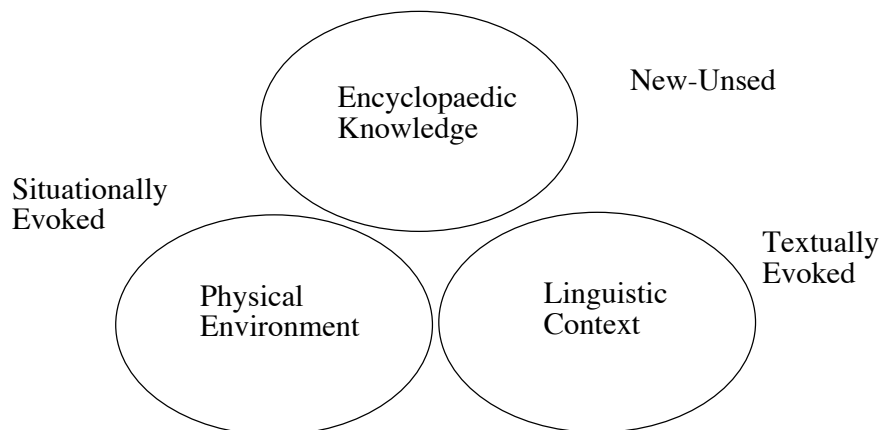
- (30) a. Columbus discovered America in 1492.
b. I'd like to take this shirt .
c. She went to see her grand-mother. The old lady was reading a book.

A. Encyclopaedic knowledgeに属するのは、談話の開始以前から聞き手が所有している（と話し手が想定している）知識である。例えばコロンブスのような固有名詞、共通の知人、物の名称などが含まれる。

B. Physical environmentは、話し手と聞き手を含む発話の現場である。je, tu, ici, maintenant のような deictic な要素が含まれる。

C. Linguistic contextは先行する談話で導入された指示物に関する知識である。

この3つの領域と Prince の指示対象の認知状態の分類を合わせると、次のような図式が得られる。



さて、問題は総称名詞である。総称名詞は次のような文に典型的に生じる。

- (31) a. La baleine est un mammifère.
b. Un train peut en cacher un autre.

このような名詞は、特定の個体を指示するのではなく、クラスあるいは類を指示す

45) M.Ariel, Accessing Noun-Phrase Antecedents, London, Routledge, 1990

ると考えられる。このような総称名詞は固有名詞と似た振る舞いをするということが知られている⁴⁶⁾。もしこのことが確かであるとするならば、総称名詞は Ariel のいう Encyclopaedic Knowledge の領域に属するものであるということになる。ならば、その認知状態は Prince の New-Unused であっても、聞き手が談話の開始以前からすでに持っていた知識の一部と考えることができる。

またこのような総称名詞は、談話に新たに DR を導入しないと見なされる。その指示対象がすでに Encyclopaedic Knowledge の領域内にあるものならば、聞き手はその領域を走査することによって指示対象を同定することができるからである。

このことは、Mithun による名詞の incorporation の研究によって傍証される。Mithun の研究によれば、類指示の総称名詞、談話に DR を導入しない名詞、および談話内で salient ではない名詞は、incorporate される傾向が見られるという⁴⁷⁾。

また総称名詞は照応現象において、DR を談話内に導入するふつうの名詞とは異なる振る舞いをするということが知られている⁴⁸⁾。

- (32) a. Un homme descendit du train. L'homme portait un chapeau noir.
b. Un cheval est un mammifère. *Le cheval se laisse domestiquer.
c. Tout homme est mortel. *L'homme rêve d'immortalité.

例文 a. では un homme によって、DR が談話内に導入されており、いったん導入された DR は、後続談話で l'homme という定名詞句によって照応することができる。

ところが、例文 b. では un cheval は総称名詞句であるが、後続談話で le cheval で照応することができない。例文 c. の tout homme も同様である。この現象は、un cheval が総称的意味で用いられた場合には、談話内に DR を導入しないと考えれば説明することができる。

この問題についてはまだまだ解決すべき点があるが、このように総称名詞が DR を設定しないと考えれば、Maçon Corpus で観察された名詞主語文の un camion doit rentrer non の主語名詞は、談話方略の観点からは問題をそれほど生じない。談話方略は新規 DR の談話内への導入に関する方略であり、この場合の un camion の認知的処理のためには、Encyclopaedic Knowledge を走査することで足りるため、談話方略は発動されないと考えられるからである。

さて、Maçon Corpus の Brand-New 名詞主語は残り2例ある。

et puis un jour que les pierres tombaient il m'a dit ben le mur je le
ferai réparer parce qu'il est à moi

46) 類指示の総称名詞と固有名詞の類似については、G.N. Carlson & F.J. Pelletier (eds) The Generic Book, Chicago, The University of Chicago Press, 1995 を参照。"Our hypothesis is that kinds are (a certain type of) individual entities, and kind-referring NPs consequently should be NPs which refer to these entities. (...) in that usage they may well be functioning like proper names." (p.65)

47) M. Mithun, "The evolution of non incorporation", Language 60, 1984

48) J.-Cl. Milner, "Coréférence et anaphores", Ordres et raisons de langue, Seuil, 1982, p.36

on dit que ces plaques blanches de les rats le bouffent ou que ça s'émiette dans les murs

この例については次の3点を指摘できる。この特徴が Brand-New 名詞が主語位置に生じることを可能にしていると考えられる。

- i) どちらも従属節に生じている
- ii) どちらも先行談話にたいして適切に定位されている
- iii) どちらも談話の背景 background 部分に生じている

ひとつひとつ検討してみよう。

まず従属節の問題である。les pierres の例では、 un jour que ...で始まる時の従属節のなかである。また les ratsは on dit que..で始まる伝聞を表す補文のなかである。従属節に生じているということは、iii) にあげた談話の背景部分という特性と密接な関係がある。

次に先行談話に対する定位である。これは les pierresの方がはっきりしている。et puis un jour que...で始まる時の従属節の導入表現のなかで用いられることで、主節との時間的関係を表す枠組みのなかに定位されている。

また les rats は左方転位された目的語 ces plaques blanchesのあとに生じており、本当の意味での文頭主語ではないという点が注目される。

次に談話の背景である。談話の流れは前景 foreground と背景 background に分割され、前景は談話の主要な筋を、また背景は主要な筋を支える状況描写などを表すとされている⁴⁹⁾。この区別についてはよく知られているので、ここではこれ以上論じない。

les pierres の例は、改築中の家の話題のなかで、家の回りを取りまく石の塀に関するエピソードの一部として現れている。その塀が自分のものか、それとも隣人のものかということを論じていて、隣人のものだと言った過去の出来事を話している。ここでの主要な部分は、「その塀は隣人のものである」ということで、「石が落ちてきた時」という部分は背景に過ぎない。

また les rats の場合は、天井の素材として使われる合板の強度が主要な話題で、その合板はネズミがかじったり、長くたつとボロボロになったりするという。主要な話題である合板にたいして、ネズミは明らかに背景をなす二次的な話題である。

背景であるということと、名詞主語とはどのような関係にあるのだろうか。Lambrecht は会話フランス語では、もともと名詞主語は少ないとの観察を示したのち、それでも生じることのある名詞主語はとりわけ談話の背景部分に生じるとしてい

49) 談話の前景・背景については、H. Weinrich, Tempus, Verlag W. Kohlhammer GmbH., 1971 邦訳『時制論』、紀伊國屋書店、および P.Hopper, "Aspect and foregrounding in discourse", in T.Givón (ed) Discourse and Syntax (Syntax and Semantics 12), New York, Academic Press, 1979 を参照のこと。

る。

“Lexical subject NPs in spoken French strongly tends to have referents whose topic status is low, and they often occur in background portions of a discourse.”⁵⁰⁾

背景部分に生じるということは、その話題性 *topicality* が低く、その後の談話で続けて話題になることが少ないということの意味する。

“By its syntactic coding, the S (=subject) referent is marked as an element of no or secondary importance for subsequent discourse.”⁵¹⁾

文の主語であるということは、無標の場合は文の主題 *topic* であることが多い。しかし、これが無条件に成り立つのは談話の前景部分である。談話の背景部分では、文の主語の持つ主題性は相対的に低下する。

このことをとりわけよく示しているのは、*les rats*の例である。

ces plaques blanches de les rats le bouffent

ここで話題の中心を占める白い色の合板 *ces plaques blanches* は、その主題性の高さの故に、左方転位されていて、文の主題位置を占めている。このため *les rats* は統語的には文の主語であるが、*ces plaques blanches* に主題の地位を奪われているため、主題性は通常の主語よりも低下している。このために、*Brand-New*の名詞句が主語位置で用いられても、通常の場合にくらべて、抵抗が少ないのである。

以前に談話内への *DR* 導入の方略(3)として、「聞き手スペースに未登録の *DR* を、談話内に唐突に持ち込むことを避けよ」という方略が存在することを示唆した。この *DR* の談話内への導入は、実は導入される位置が主題の位置かどうかということにも関連していることがわかった。唐突に持ち込むことが特に避けられねばならないのは、談話の前景の主題の位置なのである。

このように考えれば、*Maçon Corpus* で観察された3例の *Brand-New* 名詞主語は、いずれも談話方略上からは問題がないことがわかるのである。

2.10. 役割名詞句と左方転位

さて、話し言葉では転位構文が多様されることは、よく指摘されることである。*Maçon Corpus* でも転位構文はきわめて多く観察される。

(33) 表 8 転位構文
左方転位 78

50) K.Lambrecht, “On the status of SVO sentences in French discourse”, in R.Tomlin (ed) *Coherence and Grounding in Discourse*, Amsterdam, J.Benjamins, 1987, p.235

51) Lambrecht, op.cit. p.253

右方転位	51
計	129

Maçon Corpus の有主語文の総数は 1,093 であるから、そのうちの 129 例、約 12% が転位構文である。

転位名詞句の文法関係による内訳は次のとおりである。

(34) 表 9 転位名詞句の文法関係

左方転位

主 語	60
直接目的語	17
間接目的語	1

右方転位

主 語	36
直接目的語	15
間接目的語	0

どちらも主語名詞句の転位が高い比率を示している。これは名詞主語を避けるという談話方略を考慮すれば、当然のことと言える。

左方転位については、別のところでかなり詳細に検討したので⁵²⁾、ここでは残された問題について考えてみたい。

メンタル・スペース理論では、名詞句の解釈に「役割解釈」と「値解釈」とを区別する。

(35) a. La capitale de la France est Paris.

b. La capitale de la France fut occupée par les Allemands pendant la guerre.

上の例で a. の la capitale de la France は役割解釈、b. の同じ名詞句は値解釈で用いられている。値解釈では la capitale de la France は Paris と同義であり、Paris を文中に代入しても意味は変わらない。一方、役割解釈の名詞は、その値が未だに決定されていないものとして用いられており、文全体がその値を決定する。従って Paris を代入すると Paris est Paris. という同語反復的な文になってしまう。

ここでは役割解釈で用いられた名詞句を、かんたんに「役割名詞句」と呼ぶことにする。

さて、Maçon Corpus では、コピュラ文で生じた役割名詞句は 6 例観察されたが⁵³⁾、次のような顕著な特徴を示していた。

52) 東郷雄二「会話フランス語のストラテジー — 談話への名詞句の導入をめぐる」、『フランス語学研究』第31号、p.15-26を参照のこと。

53) 東郷 op.cit. では、8 例となっているが、洗い直したところ、6 例であることが判明した。

- (A) すべて c'est で左方転位されている。
- (B) 右方転位には一例もない

以下にあげる文がその例の全数である⁵⁴⁾。

- (36) a. la superficie au sol, c'est trente-cinq mètres carrés
- b. la surface au sol, c'est que c'est pas quarante mètres même
- c. ce qui est hors de prix, c'est la pierre
- d. moi la seule chose que j'y reproche c'est qu'ils l'ont enterrée
- e. je vous dis la seule chose qu'on peut gagner c'est sur le grillage
- f. moi euh le plus qui me fait râler, c'est de voir que ...

ここではこの問題を少し考えてみよう。

まず、なぜ役割名詞句は通常の主語・述語文ではなく、転位構文になっているのだろうか。この問題を考えるのに、ちょっと回り道をしよう。

役割名詞句と並んで転位構文がよく用いられるものに、総称名詞句がある。

- (37) a. Un bébé, ça pleure.
- b. Un “mizuwari”, c'est plus qu'un boisson, c'est un rite.
- c. Les crocodiles, ça croque les enfants.

このような文についてMaillard は、ce/çaによる reprise と転位構文は、会話フランス語で総称のマークとなっており、このような総称のマークを持っているという点が、会話フランス語の顕著な特徴であると指摘している⁵⁵⁾。

“Tout cela nous conduit à soutenir la thèse que le français possède
— phénomène assez rare — un générique marqué. “

Maillard は次の点に注目する。次のような通常の主語述語文は、文脈を離れては、総称か特定かを決定することができない。

- (38) a. la pie jacasse
- b. un bébé pleure

un bébé pleure は、「子供というものは泣くものだ」(総称)か、「子供が一人泣いている」(特定)か文脈がなければわからない。ところが、次のように転位すると、

54) これらの文は役割・値文であり、これは Declerck のいう “specificationally identifying sentence”、また国語学でいう「(倒置) 指定文」に相当する。

55) M.Maillard, “«Un zizi, ça sert à faire pipi debout!» : Les références génériques de ça en grammaire de phrase”, in G.Kleiber (ed), Rencontre(s) avec la généricité, Klincksieck, 1987

総称の解釈しかできなくなる。

- (39) a. la pie, ça jacasse
b. un bébé, ça pleure

このように NP, ça V という転位構文は、特定解釈と総称解釈の曖昧性の除去 *désambiguïsant* の機能を果たしているというのである。この機能を果たすうえで、代名詞 *ça* の持っている、単数・複数の対立を中和する働きと、一般化する働きとが大きな役割を果たしている。

ここで代名詞 *ça* を人称代名詞 *il/elle* に換えると、次のような結果になることに注意しよう。

- (40) a. la pie, elle jacasse. (特定解釈優勢)
b. *un bébé, il pleure.

定名詞句の場合は、もはや総称ではなく、特定解釈に大きく傾き、不定名詞句の場合は非文になる。

これは人称代名詞 *il/elle* と、指示代名詞 *ça/ce* の指示の力のちがいに帰すことができる。人称代名詞 *il/elle* は強い指示力を持ち、先行文脈から特定の名詞句を取り出すことができるが、指示代名詞 *ça/ce* は性数すら区別できない漠然とした弱い指示力しかない⁵⁶⁾。*ça/ce* のこのような指示の特性のために、*un bébé, ça pleure* のような転位文では総称の解釈が優勢になるのだと考えられる。

同様に、代名詞 *ce* とコピュラによる転位は、いわゆる定義文に多く見られる⁵⁷⁾。

- (41) a. un enfumoir, c'est un petit cylindre avec un petit bec pointu
b. la gelée royale, c'est quelque chose de bien particulier
c. la propolis, c'est une c'est une matière je vous dis euh assez visqueuse...
d. Durban, c'est l'élégance de l'homme moderne

これらの名詞は、メンタル・スペース理論でいうところの役割解釈の名詞ではない⁵⁸⁾。なぜならコピュラの後に生じている名詞は、役割にたいして値として働くことのできるような指示的名詞ではないからである⁵⁹⁾。にもかかわらず、この転位は話し言葉のフランス語で、ほとんど義務的といってよいほど高率で生じている。

56) この点に関しては、東郷雄二「Mon frère, il est linguiste et le coupable, c'est lui — 代名詞 *il* と *ce* の用法について、『フランス語フランス文学研究』53号、1988を参照のこと。

57) 例の a から c. までは、Provence 大学のコーパス “Apiculture” からの例。d. は服飾メーカーのコマーシャルとして有名である。

58) この定義文は、Declerck のいう、”*descriptively identifying sentence*” であり、メンタル・スペース理論でいう役割・値文（指定文）ではない。同定文・記述文という大きな分け方に従えば、記述文に属する。

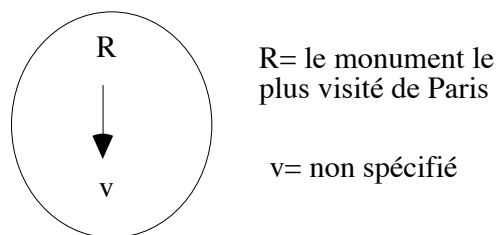
以上を総合すると、話し言葉では次の場合に、非常に高い頻度で転位が起きることがわかる。

- i) 役割・値文
- ii) 総称文
- iii) 定義文

これらに共通する特徴を考えてみよう。まず役割・値文である。問と答の対にしてみるとよくわかる。

- (42) A : Quel est le monument le plus visité de Paris ?
 B : Le monument le plus visité de Paris, c'est la tour Eiffel.

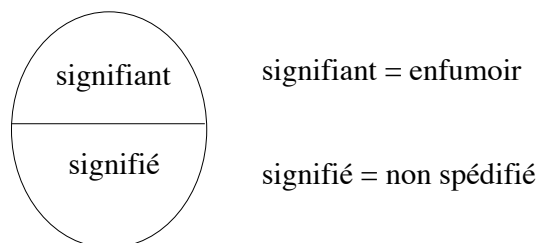
Bの文は役割・値文である。Aの疑問文が示すように、ここでは Le monument le plus visité de Paris の指示対象（すなわち値）が問題になっている。役割名詞句として用いられた Le monument le plus visité de Paris の指示対象ははまだ確定されておらず、Bの文でそれを確定している。これをメンタル・スペース風に図式化すると次のようになる。



次は定義文である。

- (43) A : Un enfumoir, qu'est-ce que c'est ?
 B : Un enfumoir, c'est un petit cylindre avec un petit bec pointu.

この例では養蜂家が使った“un enfumoir”という言葉の意味が問題になっている。聞き手はその意味を知らなかったため、たずねている。これはSaussure 風の言語記号の観点から立てば signifiant のみ与えられていて、signifié が不明な事態と言える。図示すれば次のようになる。



59) このことは、定義文で属詞位置に指示的名詞句が生じることを妨げない。L'Etat, c'est moi. や Madame Bovary, c'est moi. は定義文であり、属詞位置の moi は、場合によっては値として機能できる指示的代名詞である。指定文の L'homme le plus riche du monde, c'est moi. と比較されたい。

以上を勘案すると、次のような暫定的な一般化が可能である。

(44) 談話方略 (仮)

主語名詞句の意味そして / または指示が未確定の場合は転位せよ

これは Chafe の提唱する Light Starting Point Constraint のひとつの変奏と解釈できるかもしれない。Chafe の制約は、”A starting point is usually a given referent” というものであった。この場合 given というのは、談話にすでに登場しているか、もしくは発話の状況からすぐにアクセスできるものという意味であった。上の方略を Chafe 流の制約と矛盾なく提案するためには、Chafe のいう given の意味をもう少し拡大する必要があるだろう。ここでは暫定的に次のような制約としておく。

(45) 談話制約

主語位置に生じる名詞句は、その意味と指示とが話し手と聞き手にとって確定しているものでなくてはならない

役割・値文の名詞や、定義文の名詞は、その指示もしくは意味が聞き手にとって確定していない。比喩的に表現すると、これらの名詞は文の starting point として用いるには、手がかりとしてあまりに頼りない存在なのである⁶⁰⁾。

では総称名詞の場合はどうだろうか。ふたつの分析が可能である。ひとつは、総称名詞は特定の指示対象を持たないので、役割しかなく値を持たない名詞だとみなす分析である。このように考えれば、総称名詞は上に検討した役割名詞の場合と同じケースと見なすことができる。

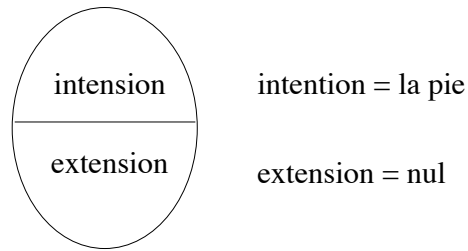
もうひとつの可能性は、総称名詞は「内包指示」⁶¹⁾を持つが、「外延指示」は持たないという分析である。通常は名詞は内包と外延を共に持っているものなので、総称名詞もこの意味で不完全な名詞と見なすことができる⁶²⁾。

どちらの分析を取るかは、現段階ではペンディングとしておく。仮に内包指示説を採るならば、次のような図式になるう。

60) ここで井元秀剛「人称代名詞Lの指示対象 — 主にCEとの対比において」、『仏語仏文学研究』(東京大学仏語仏文学研究会) 第7号、1991において提案された、「十全な名詞句」という概念との比較を試みることができるかもしれない。「十全な名詞句」とは、「特定のスペースの中に置かれたとき、性・数の分類化が可能な特性を持ち、その特性が、話者と聞き手の間に共通の了解が成立する値を自動的に与えることになる名詞句」と定義されている。本稿の趣旨に関連する部分だけを取り出せば、役割と値の両方を兼ね備えた名詞ということである。しかし、定義文の場合は値ではなく、その signifié が不明なのだから、いずれにせよこのケースまで含めるためには、「十全な名詞句」の定義を拡大しなくてはならないだろう。

61) 「内包指示」については、次の文献を参照のこと。R.Martin, “Les usages génériques de l'article et la pluralité”, in G.Kleiber (ed) Déterminants : Syntaxe et Sémantique, Klincksieck, 1986 ; N.Furukawa, L'article et le problème de la référence en français, France Tosho, 1986

62) 総称名詞を役割名詞とみなす分析と、内包指示の名詞とみなす分析が、完全に同値かどうかは今の段階では明らかではない。メンタル・スペース理論では、「役割」という概念は明確に定義されたことがないからである。



以上を総合すると、名詞句の指示と意味の両面において、何か *spécifier* されていない部分のある不完全な名詞句は、話し言葉では主語位置に生じることに大きな抵抗があり、このために転位されるのだと考えることができるのではないだろうか。

2.11. おわりに

本稿では、話し言葉のフランス語の若干の特徴を取り上げて、談話の構築という観点から論じてきた。

始めにも述べたように、話し言葉においては、書き言葉では隠されているさまざまな特徴が観察される。その主な理由は、話し言葉は話し手と聞き手の相互作用として、時系列に沿って展開・処理されるものであり、それために、聞き手の認知状態のアセスメント・処理の容易さを向上させる語用論的透明性といった、談話展開上の配慮がなされるためである。

このような特徴を示す話し言葉を研究することによって、従来あまり省みられなかったフランス語の文法の側面が明らかになると信じる。